Angle
―アングル―

町民を本気にさせた発表会

ブルーベリーの収穫
（島根県立横田高校だんだんカンパニー）

「東京はあまり地域に密着することがないから、このような地域課題解決に取り組む経験をしたことがありません。地元に21年間ずっと住んでいますが、私の地元の課題はわかりません。それに比べて、高校生のみなさんは地域についてよく考えていて地域愛を感じました。羨ましいです！」、「自分はそのプロジェクトが成功しそうかしなさそうかを考えてしまい、何か良い案が出ても取り下げてしまう。しかし彼らは実現可能性に関わらず自分が興味を持った分野で最大限に考えプレゼンを作り上げていて素直に見習うべきだと思った。」

これらは、島根県立横田高校の生徒と私の勤務する青山学院大学の学生の交流会の後に大学生が高校生に送ったメッセージの抜粋です。

高校生が地域の課題を研究したり、地域貢献活動をしたり、あるいは地域で起業したりすることは、今では珍しいことではありません。横田高校では、生徒が「だんだんカンパニー」（「だんだん」は方言でありがとう）という仮想会社を立ち上げて、ブルーベリーを生産・加工して無添加ジャムを作ったり、地元

地域の人の指導で仁多米のハデ干し（天日干し）（島根県立横田高校だんだんカンパニー）

青山学院大学
教育人間科学部
教育学科 教授
樋田　大二郎

のブランド米である仁多米を田植えから収穫、パッケージングまでして東京で販売します。高校生の表情は生産から販売までのどの場面でも生き生きとしています。そして高校生の商品はとにかく美味しいのです。また、だんだんカンパニーの〝研究部門〟の生徒は、様々な地域課題解決型学習を行い、地域の行政や産業への提案、あるいはSNSを通して高校生による地域情報の発信を行っています。高校生の活動の特徴は大学生が書いているように地域愛に裏付けられていること、がむしゃらなこと、さらに、地元の経済と社会への刺激になること、およそ700km離れた東京の大学生に対してまでも刺激を与えることができることです。高校生はブランドであり社会現象であり、地域を元気づける魔法の力を持っています。

高校生が考案作成した地元特産品活用のプリン(島根県立吉賀高校)

一　島根県の高校魅力化

筆者は島根県の高校魅力化に取り組む高校および高校を支える人たちからたくさんの感動を貰いました。このあと、私が島根県の高校で見聞きし、考え、感動したことをお裾分けさせていただきます。

島根県では、2011年度から「離島・中山間地域高校魅力化・活性化事業」を実施しています。県が3年間×500万円を助成して、さらに地元町村も人とお金を支出して、高校を魅力的にすることで高校の存続を図ろうとする事業です。当初、この事業は県から離島・中山間地域の高校への手切れ金になると危惧する人もいました。努力しても入学者減少に歯止めがかからずに、事業の終了後に廃校になるところが出るのではないかと心配したのでした。しかし、心配は杞憂でした。廃校になる高校が無いどころか、各高校がどんどん魅力的になり、入学者が増え中退者が激減しました。助成事業は2期目、3期目と継続し、事業の対象校の範囲は離島・中山間地域以外に拡大しました。そして評判が広まり、島根県だけでなく全国で魅力化を標榜する高校が続出しています。

島根県の高校魅力化の助成には条件が

林業の現状を考えるために自分たちで伐採した竹を使ってそうめん流しを制作（吉賀高校と都内大学生）

あります。地域の特色を生かした教育を行うこと、町が高校魅力化のための組織を作り助成金は同組織が受け入れて町も同組織を支援すること、県外生入学を促進することです。3つの条件は高校魅力化促進に大きく寄与したのですが、それもそのはず、3つの条件は思いつきではなくて、高校現場での取り組み＝源流を取り入れたものです。なお、2期目以降では、高校の内と外をつなぐ高校魅力化コーディネーターを置くという条件がプラスされています。

高校魅力化には3つの源流があり、1つは隠岐島前高校に代表される高校を魅力的にすることで入学者増を目指す努力です。もう1つは奥出雲町の横田高校に代表される、地域の資源を生かしたキャリア教育の充実を目指す努力です。最後の1つは島根県の多くの高校が源流です。不登校や中退、勉強離れに悩まされていた高校が、授業と高校生活を魅力的にするための方法を模索していました。そして、たどり着いた答えは教科書の教え込みを行うのではなくて、授業と高校生活を楽しくて学びがいのあるものにするというある意味もっとも基本の努力でした。高校魅力化を開始して2年目の段階でお会いしたあるベテランの国語教師が、地域の特色を生かした教育（＝地域課題解決型学習）は教科書の授業よりも生徒の思考と感性に働きかける力があると述べていました。

高校生考案のライスバーガーの販売（島根県立吉賀高校）

二　高校魅力化でしていること

横田高校だんだんカンパニー　島根県立横田高校のだんだんカンパニーの研究部門（非農産物生産・販売）の今年度の取り組みは以下です。

「奥出雲町にシニアタウンを作ろう」、「奥出雲町を高齢者の町に!!」、「島根の珍しい鉄道について紹介し、鉄道マニアに来てもらおう！」、「廃校をもっと利用しよう」「環境を整え子育てをしやすい町にする」、「奥出雲の農業を守ろう!!」、「奥出雲町でとれる木材などを使って家具や生活用品などを作ろう」、「郷土史に興味を持ってもらうには」

高校生は研究の過程で地元各所に足繁く通っており、地元住民に対して地域資源の（再）発見と地域資源を見る視点と、地域資源活用のための元気を与えます。高校生の訪問を受けた住民は「頑張りたい」、「様々な可能性を考えたい」と述べています。研究部門の生徒は、東京の大学生にも刺激と視点を与えました。そして大学生との交流から新しい視点と

町の林業の歴史を探索（吉賀高校生と都内大学生）

元気を持ち帰った高校生は、地元住民に対して元気と新しい視点がいっぱいの発表会を行う予定です。本年度の研究は現在進行中ですが、昨年度までの事例では、高校生は地元の奥出雲町への提案や上述のような住民の能動化だけでなく、SNSで高校生目線の地域観光情報の発信を行ったり、高校生アレンジのふるさと納税返礼品セットを作成したりなど、提案の実現をしています。

アントレプレナーシップ教育　島根県立吉賀高校の地域課題解決型学習「アントレプレナーシップ教育」の本年度の取り組みは以下のとおりです。

「高津川について」、「吉賀町の町づくり」、「地域医療を支える個人病院について」、「吉賀町のお米について」、「吉賀町の町づくり」、「吉賀町オリジナルについて」、「六日市商店街活性化について」、「都会における医療との違い」、「高津川での漁業について」、「七日市商店街活性化について」

昨年度のことですが、筆者が大学生を引率して吉賀高校生徒の町内の訪問聞き取り調査に同行したときに、大変驚いたことがあります。訪問先の自営業者が喜んで高校生を迎え入れてくれたのですが、そのとき、高校生の名前を聞くと父母や祖父母の名前や仕事を言い当て、今、どうしているか尋ねたのでした。大学生や私が驚いているのに対して、ある高校生はバス通学しているが、丸一日、知らない人には会わないことが多いと言っていました。その高校生は将来、大都市で知らない人と暮らすよりも地元で暮らしたいと言いました。地元愛の背景と授業で都市の大学生と交流を持つことの意義を感じた瞬間でした。

都内で自分たちが生産・加工した商品の販売体験（島根県立横田高校だんだんカンパニー）

三　高校生は地域を元気にする

高校魅力化の取り組みは多岐にわたります。また、高校魅力化の取り組みの中心となる地域の特色を生かした教育（地域課題解決型学習）の目的と方法も非常に多様です。高校生が授業の一環で地域の産業・行政・社会の課題に取り組むのですが、各校に共通しているのは次のようなことでしょうか。

（1）地域のヒト・コト・モノを教材化すること、（2）課題は生徒が生徒目線で探すこと、（3）地域の「無いもの探し」をして誰かのせいにすることはNG。「有るもの探し」をして自分たちで解決策を探すこと、（4）生徒はコーディネーターや地域住民と相互支援（共同学習）すること、（5）生徒の学びが地域の活性化と連動すること、（6）生徒の大半が高卒後いったんは町外に流出する地域特性がある中で、高校は地域課題解決型学習を通して生徒の将来のUターン促進を視野に入れること

高校魅力化の成功の秘訣を尋ねられることがあるのですが、これら6つの目的や方法が含まれていることが大切だと考えています。

四　「高校は地域存続の生命線であり、高校は地域活性化の最前線である」

生命線　U&Iターン者は高校が無いところへの移住を嫌うと言われています。住民は子どもの高校進学に合わせて挙家離村することがあります。ご老人にとっては、高校生と「おはよう」の挨拶をすることが嬉しいし、歩いている姿を見るだけで嬉しいといいます。高校生は町の文化の担い手であり町外に通学したり寄宿したりすると地元の行事の維持が困難になります。神楽の社中の一員として熱演する高校生を見たことがありますが、まさにその通りだと思いました。

最前線　高校生が住民に先立って、「無いもの探し」をやめて、地域課題解決型学習で「有るもの探し」と「有るもの活用」に取り組むことで、地域資源の（再）発見と活用のきっかけとなります。また、住民が高校生の学びを支援することをきっかけに能動化したり連帯したりします。役所からのアプローチだと住民は「お役所仕事への依存モード」になり受動的になりがちですが、高校生を支援するときは能動的になります。ときとして、しがらみを超えて連帯して頑張ることもあります。

最前線の条件　生徒が教師に言われるままに地域に入って地域の人がお膳立てしたとおりに学習するのであれば、生徒の学びや地域の活性化にはつながりにくいです。生徒は日光東照宮の「3ザル」になってはいけません。地域のお客様でなくて地域の支援者にならなければいけません。語呂合わせで言うと、「地域の3ヤル」にならなければいけません。つまり、見ザルでなく見入る、聞かザルでなく聴き入る、言わザルでなく言う（＝ヤル）です。

高校生が3ザルから3ヤルへと成長するのは思うほど困難ではありません。高校生は、他の年代にもまして好奇心と自己実現と自己表現が大好きな年齢です。教科書を覚えることは詰め込みです。これに対して地域に働きかけることは体験学習であり、好奇心の充足であり、自己実現であり、自己表現であるので、大人がブレーキを踏まなければ高校生の3ヤルは加速、場合によっては暴走にまで至ります。

ある高校の魅力化の授業の発表会で次のような出来事がありました。小規模校であり、生徒数よりも多いと思われる地域住民が発表を聞きに集まりました。何組かの高校生の発表がありました。内容は地域の有機米やワサビなどの農産物を加工・販売した報告、町で育った人にしか分からない風景の写真で作られたカレンダーを制作・販売した報告、子どもや老人に焦点を当てた防災体制と高校生に出来る防災活動の検討結果の提案などでした。町防災体制の提案の時のことです。町民の一人が、報告に至るまでの高校生の努力と成長を賞賛しつつ、多数の聴衆の前で、町の防災意識と防災体制が非現実的で安全面で欠陥があること、そのことをもっと研究・提案すべきであることを主張したのでした。高校生が地域の（安全）資源の状況を明らかにし資源の活用方法を提案したことが、地域住民を能動化したのでした。

（参考）樋田大二郎・樋田有一郎『人口減少社会と高校魅力化プロジェクト――地域人材育成の教育社会学』、明石書店（２０１８年）。

高校生と都内大学生が協働研究（島根県立吉賀高校）